

第2回国民体育大会(1947年石川国体)に関する研究(2) —競技施設設備の整備について—

A study of the 2nd Japan national sports Meeting in Ishikawa, 1947 (2)
—Facilities and Equipment Preparations—

大久保 英 哲 (人間科学部スポーツ学科特任教授)

Hideaki OKUBO (Faculty of Human Sciences, Department of Sport Science, Specially-appointed Professor)

〈要旨〉

1946年に始まった「国民体育大会」は、戦後始められたスポーツ大会の中では最も長い歴史を持つ。だがこの大会も2023年佐賀県で行われる第78回大会から「国民スポーツ大会」と改称される。名称変更を機に、おそらく大会の開催目的や内容にも修正が加えられ、新たなスポーツ競技大会として歩みを始めることになるであろう。そこで、これまでの「国民体育大会」を総括して、その歴史的評価を加えたい。本論文はその一助として、石川県で行われた1947年の国民体育大会を取り上げ、その実態を明らかにしつつ、歴史的な位置づけを行う。本稿は、敗戦直後の混乱期、この大会の施設設備整備がいかに行われたのかについて報告する。

〈キーワード〉

第2回国民体育大会, 石川国体, 戦後復興, 世直し国体 競技施設設備

はじめに

本論文は、拙稿「第2回国民体育大会(1947年石川国体)に関する研究(1) —その構想と準備について— (金沢星稜大学人間科学研究, 第13巻1号)」に引き続く研究である。敗戦直後の食糧難, 物資不足の当時, 第2回国民体育大会(1947年石川国体)の競技施設設備が, いかに整備されたのかを, 『第二回国民体育大会報告書』⁽¹⁾, 「第二回国民体育大会記念写真帳」⁽²⁾を中心にしておく。

1. 1946年当時の世相

まず, この国体が行われた当時の社会状況を見ておこう。1945年8月15日の終戦以後, 東京をはじめ, 焼け野原となった全国の諸都市では, 茫然自失の状態に陥った。ことに青少年の精神的荒廃が甚だしく, これに対する政治も教育もほとんどなすべを知らなかった。

この当時の世相を語る2つの出来事を見てみよう。一つは1946年, 連続婦女暴行殺人事件の小平義雄(当時42歳)が逮捕された事件である。「いい買い出しの口がある」「コメを世話する」と女性をだまして, 寂しい場所に連れ出し, 7件の暴行・殺人を繰り返した事件である(23年最高裁で死刑確定)⁽³⁾(991頁)。また1947年, 日大の古橋広之

進が400メートル自由形に4分38秒4の世界新記録を作った。同じ日大の橋爪四郎と二人で, 泳ぐたびに記録を更新し, 「フジヤマのトビウオ」と呼ばれた。「ちゃんとしたものを食べればもっと速く泳げる」⁽³⁾(993頁)との談話が, 戦争と食糧難の影が濃く残る当時の世相を物語る。

石川県は, 幸い戦災を免れたが, 百万石の郷土金沢へ, 能登へと県内外から多くの人々が引き揚げ, 昭和22年の人口は92万6千人あまりに増加した。食糧事情も緊迫し, 環境衛生も悪化した。昭和22年の石川県死亡原因の第一位は相変わらず結核であった。石川県の結核死亡率は統計がとられるようになった大正期以後, 全国のワースト県の一つであった。石川県は総力を上げてこの対策に取り組んだが, なかなかその効果は上がらなかった。石川県の結核死亡率が全国平均23.1(人口1万人当たり)を下回ったのは, 実に昭和21年のことだったのである。しかし敗戦に伴う混乱と生活環境悪化の中で, 昭和22年には再び結核王国1位の汚名を被らねばなかった。

貧困のため犯罪も多発し, 「汽車や電車に乗っても, 風呂屋に入っても, 映画館に入っても, 持ち物や履物に始終気をつけていなければならない」状態であった。昭和22年の金沢は大雪であったが, 人々が冬を乗り切る炭は家庭配

給の1~2俵しかなかった。労使の対立激化、ゼネストなど、とにかく「相克摩擦」が生じ、人心の荒廃は深刻であった⁽⁴⁾ (424-438頁)。

2. 競技場建設

昭和22年1月中旬、金沢市を中心に石川県内で第2回国体開催が内定、石川県土木部が主体となって、各競技場建設を計画、融雪を待って、競技場建設に着手した。当時の建設資材の入手難と諸物価の高騰により事業費の膨張、資金難に加えて準備期間の短さ、天候不順による工事の遅れなど、その苦労は並大抵のものではでなかった。「大会報告書」⁽¹⁾ (7頁)は「県民一丸になっての努力と、資材の節約、合理的工法によって克服、10月中旬には各競技場の完成を見た」と率直にその喜びを記している。以下「大会報告書」から各施設の所在地、総地(面)積、着工・竣工日時、総経費、工事概要、および競技場についての選手たちの感想等を見てみよう。なお、本報告書には、誤字脱字、旧字体、句読点の脱落などが散見されるため、文意を損なわないと判断される範囲で修正している。

(1) 金沢市運動場

所在地 金沢市富樫町、総地積2万㎡、昭和22年5月25日着工、10月25日竣工、総工費662万円

「県下唯一の第二種公認陸上競技場として市民に親しまれ、戦前までは地方競技大会にまで使用されていたものであるが、その走路の曲率半径の小さいのが欠点とされていたものを、今大会に備え、曲率半径36.5メートル、走路幅員10m単心円の400メートル・アンツーカー・トラックに改造し、観覧席も特別観覧席のほか、盛土芝生スタンドを増設し、1万1千名の観客を収容可能ならしめたほか、選手控室、洗体室(シャワー室)等の設備を完備した」⁽¹⁾ (7頁)のものであった。

なお、マラソンはこの金沢市運動場を起点とし、河北郡英田村字能勢の村役場前を折り返す往復42.195キロのコースであった。

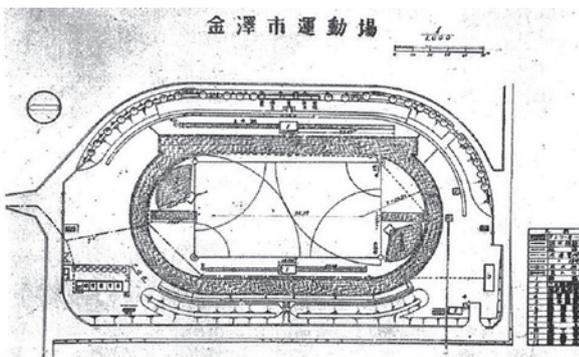


図1. 金沢市運動場 (出典2) 頁記載なし

現在、金沢駅からおよそ5km、金沢市富樫3丁目にある市南総合運動公園の一角にある金沢市陸上競技場(金沢市弥生3丁目)は、1周400m、全天候型トラック8コースの第2種公認競技場である。この競技場は2つの点で、昭和天皇にゆかりが深く、いわば金沢の昭和記念競技場である。

というのも、この競技場は、1924年(大正13)1月、「皇太子御成婚」記念事業として計画され、翌1925年10月31日、当時の大正天皇誕生日(天長節)に合わせて開場式が行われた。皇太子とはすなわち後の昭和天皇のこと、つまり「昭和天皇ご成婚記念競技場」である。また今は恒例となって誰もこれを特別視しないが、国体という国民のスポーツイベントに天皇が臨席した初めての記念すべき大会であった。

この競技場は、毎年4月上旬になると、約110本の桜がみごとに咲き誇り、無料で開放される隠れたお花見スポットでもある。堂々と古木の貫録を漂わせる満開の桜の下で、新入生を迎えたばかりの金沢市内外、中・高の大勢の陸上部員たちが無心に練習に打ち込む姿を目にすることができる。敗戦後の失意の中で「棒高跳び」の飛躍に心を奪われた人々の心と、昭和への思いを新たにできる金沢の「昭和記念競技場」である。

(2) 野球場

①兼六園野球場

所在地 金沢市出羽町、総地積 18000㎡、起工 昭和22年6月1日、竣工 10月25日、総工費 233.3万円

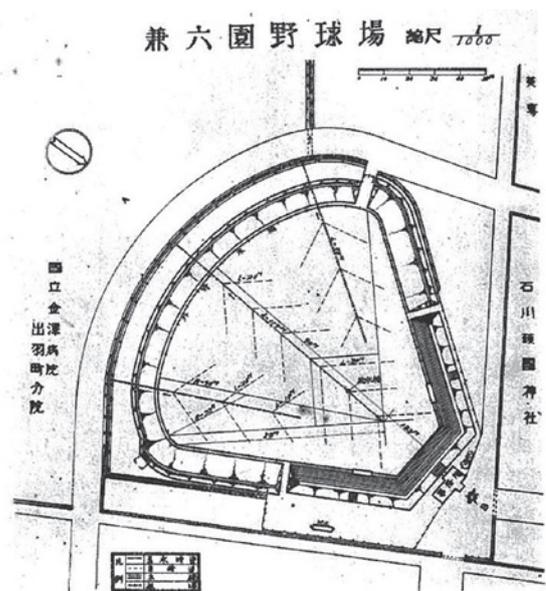


図2. 兼六園野球場 (出典2) 頁記載なし

「県下に硬式野球場として正式なものがないところから、金沢市旧小立野練兵場跡を選び、北陸唯一の硬式野球場

を新設したもので、方位は本塁より投手板に向かい、西南より西5度の理想的方位を取り、ファウルライン85m、センターライン90m、本塁よりバックネットまでの距離18.30m。投手板の高さは各塁より35cm高として、50～300分の1の勾配を付し、表層に赤土、下層石炭殻として排水を完全ならしめ、また高さ8.75m幅24mの鉄骨金網張りのバックネットを有するもので、観覧席は内野石積10段、収容人員4千名、外野盛り土芝生スタンド、収容人員1万6千名、選手控室、更衣室を有する他、投手板下及び選手溜まりに放水栓等を施設した⁽¹⁾（7頁）ものである。

この兼六園野球場は1973年、廃止され、跡地に建築家黒川紀章による設計で、1977年に「石川厚生年金会館」（2019年現在北陸電力本多の森ホール）が完成した。ホールは、許される建蔽率を最大限利用したため、野球場のグラウンド形状に沿った扇形の外観とホールの正面に添った道路が弧を描くのは球場外野スタンドの名残である。またホールの背後には「懸営兼六園野球場」「昭和22年竣工を」刻んだ石柱が残されている⁽⁵⁾。



図3. 本多の森ホール (https://loco.yahoo.co.jp/place/g-vKUbCuab0qo/photo?utm_source=dd_spot&sc_e=sydd_spt_slo_n_p_img&lsbe=1&photoid=31389688847b0d55258907deeb4fd5e3cc4932a5, 2019.12.10取得)

このように兼六園野球場は、兼六園に隣接する旧陸軍小立野練兵場の跡に、石川国体の開催に合わせて1947年10月25日に完成し、1973年に取り壊された。26年しか存続しなかった戦後の歴史的産物であったといえるかもしれない。国体時には昭和天皇も訪れている。護国神社に隣接する練兵場の跡にこつ然と出現した戦中の「敵性スポーツ」の代表格、野球場とそこで繰り広げられる熱戦と歓声はまさに平和の到来を象徴する出来事であったが、戦没者や英霊の心中は複雑であったかもしれない。

この兼六園野球場について、全国中等学校野球連盟副会

長佐伯達夫氏は「排水施設を完全に」との見出しの下、次のように述べている。

「交通の便利な市内に短期間によくもこれだけの良い球場ができたものだと思う。しかし施設については注文がある。バックネットの両空席とスタンドの一般観客席の間をうんと広くしなければ、役員や新聞社の仕事に差し支える。観覧席の通路がほとんどない。便所が1か所だけしかない。グラウンドの土質は非常に良い。ただし北陸のような雨の多いところでは、水はけの注意がもっと必要。選手席などはすぐ水浸しになる。球場の広さは中学生なら手ごろだが、大学以上にはちょっと狭く、ホームランが出すぎるだろう。グラウンドと観客席を仕切る塀ももっと高くしなければならぬ⁽¹⁾（79-80頁）。この佐伯の予言の通り、1948年4月に初めて開催されたプロ野球公式戦・太陽ロビンズー急映フライヤーズ戦で両チーム6本塁打と、当時としては本塁打の多い試合だったことがきっかけで、同年9月に100万円の費用をかけて両翼90m、中堅97mに拡張された。その後も何度か改修工事が加えられたが、施設・設備の老朽化、周辺地域の宅地化により、1973年11月をもって閉鎖、施設は撤去された⁽⁵⁾。

②金沢市立工業野球場

所在地 金沢市泉野、総地積 9000㎡、起工 昭和22年6月23日、竣工 10月25日、総工費 28万円

「市立工業学校運動場の整備を行い、高7m、幅24mの木骨バックネット及び、木造長10m、幅5mのスタンドをネット裏に新設した⁽¹⁾（7頁）ものである。



図4. 金沢市立工業高校泉野旧校舎⁽⁶⁾

(3) 軟式野球場

①芦城公園野球場

所在地 小松市丸内町、総地積 38,000㎡、起工 昭和22年7月14日、竣工9月12日、総工費 79万円

芦城公園野球場は「軟式野球場として建設された県下唯一の野球場であり、方位は本塁より投手板に向い、正北

より西20度、ファウルラインの長さ75m、センターライン90m、本塁よりバックネットまで、18.30m。投手板の高さは各塁より35cm高とし、200分の一の勾配を付したもので、内野表層は炭殻及び粘土をもって仕上げたものであり、バックネット高は8.30m、幅21.82mの鉄骨金網張りで、内野観覧席は土盛り、座席は板張り7段、収容人員2500名を有し、選手控室を設置したものである。⁽¹⁾ (7頁)

1954年、1980年、2008年に大規模改築・改修がなされ、小松運動公園末広野球場（愛称弁慶スタジアム）として、現在に至っている。

②県立小松工業高校

所在地 小松市浜田町、総工費 5.6万円

「県立工業学校校庭に粘土を敷き均し、整地を行い、木骨バックネット及び木造スコアボードを新調」⁽¹⁾ (7頁)したものである。県立小松工業高校があった浜田町は小松市役所の南西約1キロにあり、現在地（小松市打越町）とは異なる。

③小松市芦城小学校

所在地 小松市寺町、総工費 5.0万円、県立小松工業高校と同様

(4) 庭球場（硬式）

①兼六園庭球場

所在地 金沢市宮守堀通り、総地積 9500㎡、起工 昭和22年6月1日、竣工 10月25日、総工費 115万円

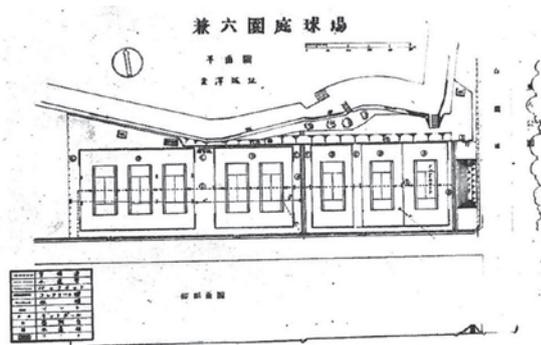


図5. 兼六園庭球場（出典2）頁記載なし

「本敷地は、旧金沢城の東南隅に建築せられていた被服庫の跡地であって、整地した上排水施設をなし、アンツーカーコート1面、クレールコート7面を併設したものである。本コートの長軸は理想的の南北線であり、メインスタンドは東側に新設、石積10段、収容人員500名、ネット裏の盛り土芝生スタンドは収容人員1800名を新設し、コートの周囲には高3mの木骨金網張りバックネットを築造、またコートの北側に高3.20mの板張り練習板1ヶ所設置するほか、

放水栓5ヶ所を新設した。」⁽¹⁾ (7-8頁)

「金沢城いもり堀」はもともと金沢城の南西側を囲む外堀であった。1907年（明治40）、旧陸軍により上部の削平と埋め立てが行われ、陸軍被服庫が置かれた。この跡にテニスコートを新設したものであるが、日本庭球協会副会長熊谷一弥氏は「問題は方向と排水」として次のように評した。「兼六園コートは見事なコートで、地面はまだ欲しいが、新設のものとしては非常に良い。ただ方向が悪く、山際の方が太陽に直面しなければならないのが残念だ」⁽¹⁾ (80頁)と旧堀の跡地に作られたコートの限界も示していた。

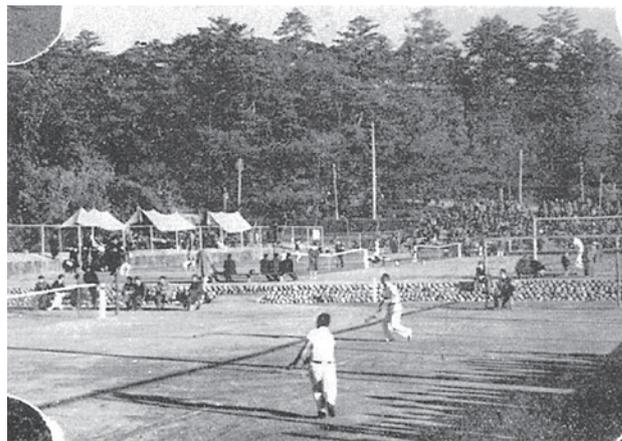


図6. 兼六園庭球場（出典2）頁記載なし

国体では、テニスはもちろんのこと、バレーボール会場としても用いられた。兼六園コートは県庁裏コートとも呼ばれ、1998年まで一般に開放され、ロケーション抜群のコートとして市民に愛されていた。

その後2010年（平成22）にいもり堀は復元され、その美しさで金沢城の名所の一つとなっている。ここに国体を機にテニスコートが新設され、人々に親しまれていたことを知る人はまれである。



図7. 現在のいもり堀（出典 石川県「金沢城公園」）
http://www.pref.ishikawa.jp/siro-niwa/kanazawajou/kanazawa_castle_spot/imori.html (2019年12月19日取得)

(5) 庭球場（軟式）

①七尾市小丸山公園庭球場

所在地 七尾市藤橋町、総地積 7200㎡、起工 昭和22年8月17日、竣工 10月29日、総工費 116万円

「七尾市小丸山公園東備崖下都市計画公園にクレークート6面を新設したもので、コートの方軸の方向は2面南北線、他の4面は正北より東37度であり、コートの背後及び側面の一部に高さ2mのバックネットを築造した。観覧者収容人員は5千名。」⁽¹⁾（8頁）

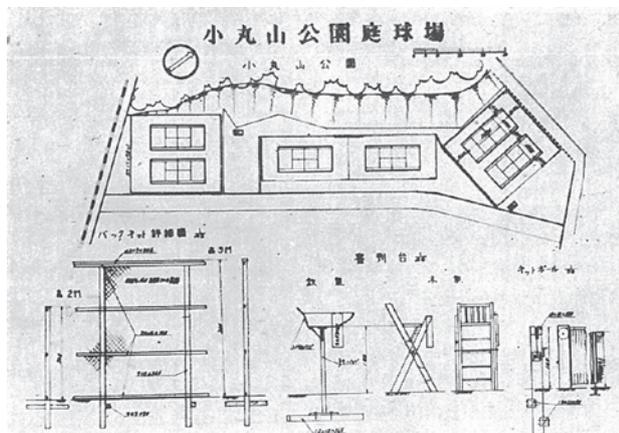


図8. 七尾市小丸山公園庭球場（出典2）頁記載なし

この小丸山公園コートについて、「七尾庭球コートと兼六園球場が窮屈なのが目立った」⁽¹⁾（79頁）。また大会員三島正雄氏は「七尾小丸山軟式庭球コートは、会場設営に当たられた当局の熱意と苦心のあとは感心するが、残念ながら、大会場としては理想的だとはいいがたい。会場が2つに分かれていた（小丸山公園コートと七尾中学校会場とのこと：筆者）。大会本部の設置がなかったため、試合の進行が遅々としてはかどらなかった。またコートの土の悪いのと、水引の遅いのが欠点であった」⁽¹⁾（80頁）と、設備についてはコート敷地の余裕のなさ、土質と水はけの悪さを指摘している。なお、このコート跡は現在小丸山公園駐車場として利用されている。

②県立七尾中学校庭球場

所在地 七尾市藤橋町、総地積 2000㎡、起工 昭和22年8月17日、竣工 10月29日、総工費（小丸山に含まれる）

これは「県立七尾中学校校庭の東西隅にクレークート3面を新設したもので、長軸方向は南北線、コートの背後及び側面の一部に高さ2mの木骨バックネットを築造した。観覧者収容人員は3600名収容可能」⁽¹⁾（8頁）というものであった。

(6) 蹴球場「ア式」（ホッケー場に兼用）

金沢市 第四高等学校、所在地 金沢市広坂通、総地積 9780㎡、起工 昭和22年6月30日、竣工 10月2日、総工費 25.7万円

「第四高等学校校庭を整地し、上層に山土を敷き均し、転圧の上、幅85m、長115mを区画して競技場を設けたも

ので、ゴールポスト及び、採点板1基を新設した」⁽¹⁾（8頁）もので、比較的単純な整地工事であったことがわかる。

なお「ア式」とはアソシエーション・フットボール、すなわちサッカー、設計図中の「ラ式」とはラグビー・フットボール、すなわちラグビー、送球とはハンドボールのことである。四高グラウンドが多用途に使用されたことがわかる。

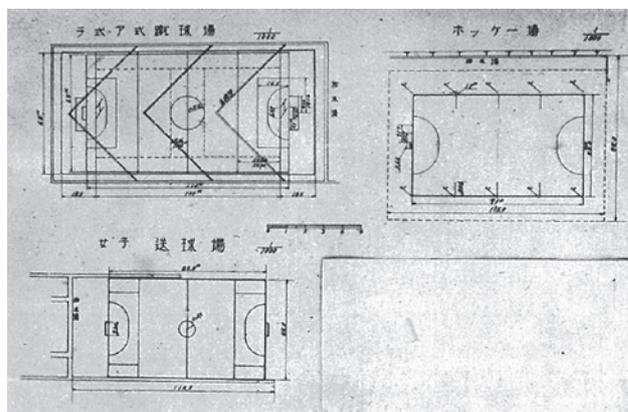


図9. ラ式・ア式蹴球場、ホッケー場、ハンドボール場（出典2）頁記載なし

なお、この四高サッカー場について日本サッカー協会副理事長竹澤重真氏は「傾斜があって困る」と次のように評した。「広さは十分だが、傾斜はまだかなりあり、ことに北西の隅が高すぎる。新しく盛った土砂がまだ固まらず、雨天の時でも砂をかける始末だ。周囲が高く、排水もむづかしかるうが、雨後はひどすぎる」⁽¹⁾（80頁）

(7) 排球場

①金沢女子専門学園

②金沢美術工芸専門学校

所在地 金沢市出羽町、総地積 3051㎡、起工 昭和22年6月19日、竣工 8月5日、総工費 13.6万円

「女専には幅10.50m、長21.60mのもの4面、美専には1面、各校庭を整備、山土を敷き均し、転圧したものである」⁽¹⁾（8頁）

この2つの学校は出羽町にあった旧陸軍施設練兵場、兵器庫を転用して、1946年に開校された。『金沢女子短期大学二十年のあゆみ』⁽⁹⁾（32頁）によれば、金沢女子専門学園は兼六園側の敷地と木造瓦葺2階建3棟の兵器庫を、金沢美術工芸専門学校は小立野側敷地と赤レンガ2階建3棟を校舎に転用している。金沢美術工芸専門学校は昭和30年金沢美術工芸大学と改称、昭和47年（1972）現在地の金沢市小立野5丁目に移転した⁽¹⁰⁾（21頁）。一方金沢女子専門学園は1950（昭和25）年金沢女子短大に改称⁽⁹⁾（125頁）、1981年現在地の金沢市末町に移転した⁽¹⁰⁾。

2020年1月現在は、「兼六園周辺文化の森」として、石川赤レンガミュージアム（県立歴史博物館・加賀本多博物館）、石川県立美術館、国立工芸館の整備が進められている。ここに2つの学校があったことを知る人は少ない。（図11参照）

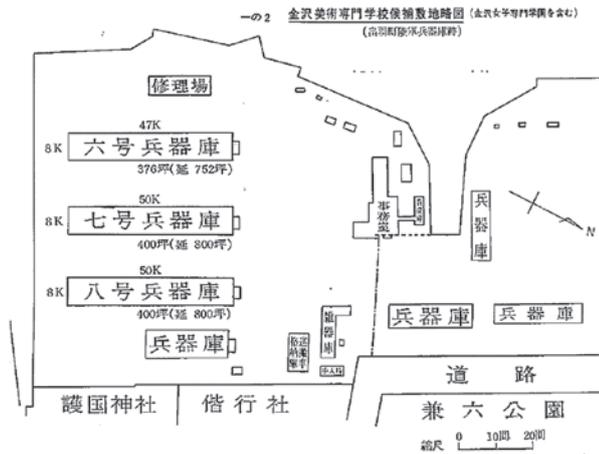


図10. 金沢美術専門学校・金沢女子専門学園候補敷地略図（出羽町陸軍兵器庫跡）（出典『金沢女子短期大学二十年のあゆみ』32頁）



図11. 国立工芸館建設予定地・兼六園文化の森（出典：石川県ホームページ
<http://www.pref.ishikawa.jp/kikaku/kogeikan/top.html> 2020年1月10日取得）

さらにバレーボールコートはこの両校の5面では足りず、次の通り兼六園野球場の南隣に4面設けられた。

③金沢市出羽町（兼六園野球場隣）

総地積 3,500㎡，起工 昭和22年6月1日，竣工 10月25日，総工費 17万円

「兼六園野球場の南に接して、旧小立野練兵場を整地のうえ、石炭殻、山土を敷き均し転圧し、幅10.50m、長21.60mのコート4面を併設したものであり、コート周囲は高1.20mの金網を築造したものである」⁽¹⁾（8頁）

図12（写真）にみられるように、バレーボールは、屋外競技として行われることが通例であった。この写真では選手がシューズを着用しているが、前年の第1回国体では

「ハダシで出発」と、女子選手たちが屋外コートを裸足でバレーボールをしている様子が見られる。



図12. 出羽町コートのバレーボール（出典2）頁なし

(8) 籠球場

①高岡中学校

金沢市高岡町

②小將町中学校

金沢市小將町

③県立第一女子高等学校

金沢市穴水町

④石川師範学校女子部附属小学校

金沢市広坂通り

起工 昭和22年7月15日，竣工 10月10日，総工費 4.5万円

これらの4校体育館ではバスケットボール用に、「バックボールドを扇形に改造，コートの拡大，ラインの引き直し，掲示板，得点版の新設，照明装置改良等」⁽¹⁾（8頁）を実施した。



男子第二回戦 新潟市申立倉敷工
10月11日 高岡中学校撮影

図13. 高岡中学校での試合風景（出典2）頁なし

これらのバスケットボール会場について、日本バスケットボール協会理事長鹿子木目子氏は「観客の収容施設を」の見出しで次のように述べた。「高岡町校，小將町校，県一女，女子附属の設備採光ともコートとしてはいずれもよ

いが、もう少し観衆の入る余裕が欲しい。ボルトが新式を取っているのには感心した。少なくとも高岡町、小將町両コートは全国にも恥ずかしくはないが、地元関係者自らドロ靴で入り、ザラザラ。傷んでいるのは惜しい」⁽¹⁾（80頁）

（9）ラグビー場（男子送球場併設）

①金沢高等師範学校

所在地 金沢市野田町，総地積 10000㎡，起工 昭和22年6月20日，竣工 10月10日，総工費 25.7万円

「旧陸軍特科隊跡に新設された金沢高等師範学校校庭を整地し、石炭殻を下層、黒土、砂を上層として敷き均し、幅70m、長148mの競技場を建設したもので、ゴールポスト採点板、及び木柵等を設けたものである」⁽¹⁾（8頁）

（10）（女子）送球場

①金沢青年師範学校

所在地 金沢市野田町，総地積 5800㎡，起工 昭和22年10月15日，竣工 10月25日，総工費 3.8万円

「ラグビー場に同じ」⁽¹⁾（8頁）

金沢高等師範学校、金沢青年師範学校は1946年に金沢市野田町の旧陸軍施設地に移転した。両校とも1949年の学制改革により閉校。現在は金沢市平和町の金沢大学附属学校園（幼・小・中・高）となっている。

（11）拳闘場

金石町湊々園内

起工 昭和22年10月15日，竣工 10月25日，総工費 8.3万円

「雨天に備えて、屋内競技場の整備を行ったほか、屋外観覧席の整備、組み立て式リンクを設置した」⁽¹⁾（8頁）ものである。

金石町湊々園の跡地は現在、金沢市金石本町「石川県銭屋五兵衛記念館」付近である。

（12）馬術場

金沢競馬場

所在地 金沢市中村町，総地積9000㎡，起工 昭和22年10月1日，竣工 10月25日，総工費 29.3万円

「既設金沢競馬場のうち、幅80m、長120mを区画して敷地をなし、表層として砂を敷き均して転圧したものであって、各種障害物を作成」⁽¹⁾（8頁）したものである。

この中村町にあった旧金沢競馬場は、現在金沢市立高岡

中学校敷地等に利用されている。

（13）相撲場

七尾市愛宕山相撲場

所在地 七尾市小丸山公園下，総地積2600㎡，起工 昭和22年7月，竣工 10月，総工費 76.8万円

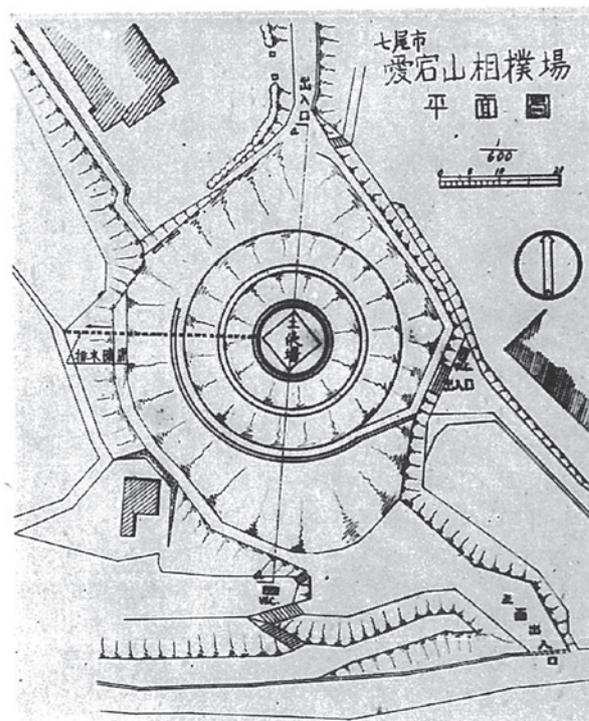


図14. 七尾市愛宕山相撲場（出典2）頁なし

この愛宕山相撲場工事は、「毎年地方大会の為に利用せられていた相撲場の改造であって、すり鉢型で3～6割の勾配の観覧席を有する半径35mのものであり、土俵は15尺、土壇は24尺角のもので、上屋は柿葺入母屋造り、観覧者9千名を収容可能」⁽¹⁾（8-9頁）とするものであった。

この相撲場について、大会委員平田義太郎氏は「十分ではないが良好」と評し、次のように述べている。「七尾愛宕山相撲場は8月下旬下見に来たときは実にひどかったが、見違えるように立派なものが出来上がった。理想的な大会場としてはまだ十分でない点もあるが、資材経費の点から、今日の状態ではあまり贅沢は言えない。この四間土俵は相撲の盛んな石川県下でも唯一のものと思う。あとに残る立派なものである。」⁽¹⁾（80頁）

（14）水泳場

松任中学校内

所在地 石川郡松任町，総地積4600㎡，起工 昭和22年5月21日，竣工 8月20日，総工費 135万円

「幅20m、長50mの公認プールとして県下唯一のもので

あるが、今度の大会のため、不完全な給水施設を全面的に改造せるものであって、一昼夜一万石の揚水能力を有する20馬力の堅型電動機直結のボアホールポンプBHA型を設置して、地下60mより揚水したほか、10mダイビングの補強と3mダイビングの新設をなし、オーバーフローを改造す。また観覧席は4,300名収容できごとく増設し、更衣場その他の付帯施設を整備した⁽¹⁾（9頁）ものである。

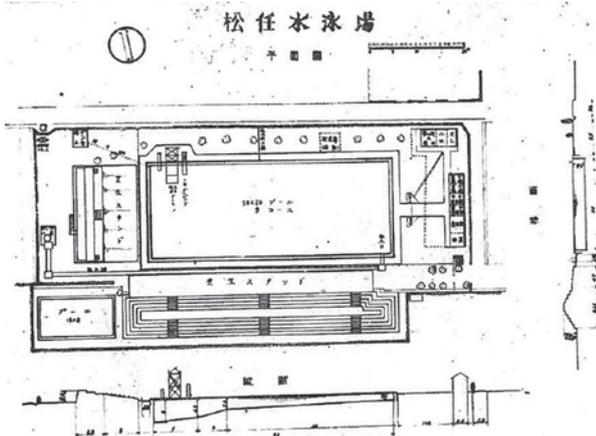


図15. 松任水泳場（出典2）頁なし

(15) 卓球場

錦城小学校

所在地 江沼郡大聖寺町，起工 昭和22年9月2日，竣工 10月25日，総工費 11万円

「硬式及び軟式10面のうち、各7面を新設したもので、コートは全て桂を用いて作製したほか、室内には照明装置と暗幕を整備した⁽¹⁾（9頁）ものであった。

この卓球場について、日本卓球協会参与高村義雄氏は「広くて試合も楽」と、次のように評した。「大聖寺錦城コートは施設から言って、全国的にも立派なもので、選手も広々と試合ができ、見る人も十分競技を味わえた。ただ惜しいのはプレイのみ考えて、会場の窓を閉め切り、暗幕を張りめぐらしたため、場内を陰気の流通を悪くしたことだ。またコートに県庁の係員が知らずにペンキを塗ってしまったため、バウンドが悪くなり、非常にやりにくかったようだ」（22.11.5朝日新聞、⁽¹⁾80頁）。

まとめ

第2回国体石川大会の競技場整備は、県、金沢市、小松市、七尾市が分担し、その経費は一部の国庫補助金を除き、県費、各市費から支出された⁽¹⁾（6頁）。各施設の総工

費を合計すると、総額1600万円余りである。

金沢市の場合、旧陸軍施設であった被服庫のテニスコートへの転用、出羽町練兵場の兼六園球場、屋外バレーコートへの転用、野田町陸軍施設の学校転用とその整備など、「軍都金沢」の「文化都市金沢」あるいは「学都金沢」への転換点として位置づけられる。また七尾市、小松市においても新設競技場は最小限にとどめられ、すべて改修、ないし、既存施設の部分的整備、小・中・高などの学校体育施設の整備が中心であったことに最大の特徴がある。これは敗戦直後の物資・資材難が最大の障壁であったこと、工事そのものが、単純土木工事で、市民・県民による失業対策事業の性格を持っていたことと大きな関係がある。昭和22年2月2日金沢市会は「第2回国体整備費600万円」を可決、同2月26日石川県会は大会開催に必要な諸設備を完備するために、「失業救済公共事業費1541万円、都市失業救済事業応急事業費819万円」を可決している⁽¹⁾（4頁）。すなわち国体整備費は計2960万円であるから、1400万円余りは運動具等の設備・備品費に充当されたものとみられる。1948（昭和23）年当時の小学校教員の初任給が約2000円⁽⁷⁾、現在の小学校教員初任給が約20万円であるから、約100倍。計2960万円という整備費は、単純換算すると、29億6千万円に相当する。2017年完成した城北市民運動公園「金沢プール」の総工費が73億円、2019年に完成した東京オリンピック施設、「新国立競技場」が単体で1569億円を要したことを考えれば、格安の感がある。

清瀬大日本体育会理事長は「資材不足の折、かかる立派な大会ができることは県民及び松任町（夏季大会）の尽力のおかげ⁽¹⁾（79頁）」と言い、「（大会の）記録的な面からみて、もっとも痛切に感じたことは、食糧事情の悪いことではなく、運動具の不足である。このことは陛下もお気づきになっておられ、私からももうしあげておきました」（22.11.4毎日新聞、⁽¹⁾79頁）というように、資材や運動用具の入手が困難な中での最大限の努力を褒め称えている。総じて、「全般の競技場を通じて、地方大会としては十分だった。まず90点というところ⁽¹⁾（79頁）」という高い評価が得られたのであった。

時代は違うが、スポーツやそのイベントが人々の身近なところにあり、その経費も比較的安価だったこの第2回国体の在り方は、今やスポーツが人々を疎外する恐れさえ想わせる現代のスポーツとそのイベントを見つめなおす良い機会になるかもしれない。

引用参考文献

- (1) 第二回国民体育大会石川県準備委員会（編）『第二回国民体育大会報告書』，昭和23年
- (2) 第二回国民体育大会石川県準備委員会（編）「第二回国民体育大会記念写真帳」，昭和23年
- (3) 川崎康之ほか監修『読める年表 日本史』，自由国民社，1990（1995増補改訂）
- (4) 大久保英哲「復興と第二回国民体育大会」，『金沢市史 通史編』3 近代，第5章第5節，661-678頁，2006年
- (5) 北國毎日新聞，1949年4月27日，北國新聞2009年9月19日，またNPBニュース2019年4月26日「球場巡り・第17回（1試合13本塁打と完全試合の舞台 県営兼六園球場）http://npb.jp/news/detail/20190426_02.html（2019年12月19日取得）
- (6) 金市高50年編纂委員会『金市高五十年』，金沢市立工業高校，昭和53年，2頁
- (7) 戦後昭和史：小学校教員の初任給，<https://shouwashi.com/transition-primaryteacher.html>（2019年12月20日取得）
- (8) 金沢美術工芸大学『金沢美術工芸大学二十五年史』，北陸明治印刷，昭和48年
- (9) 学校法人金沢女子短期大学『金沢女子短期大学二十年のあゆみ』，明治印刷株式会社，昭和41年
- (10) 金沢学院大学沿革，<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%AD%A6%E6%A0%A1%E6%B3%95%E4%BA%BA%E9%87%91%E6%B2%A2%E5%AD%A6%E9%99%A2%E5%A4%A7%E5%AD%A6>（2020年1月10日取得）

